

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20510230

研究課題名 (和文) 東アフリカ沿岸地域におけるジェンダー観と生活史研究—女性の「語り」を通して—

研究課題名 (英文) Studies on Gender Views and Life Histories in Swahili Area: Through Women's "Narratives"

研究代表者

竹村 景子 (TAKEMURA KEIKO)

大阪大学・世界言語研究センター・准教授

研究者番号：20252736

研究成果の概要 (和文) : 3 年度にわたって、東アフリカ海岸地方において現地調査を展開した。各人が対象地域において女性のライフヒストリーの収集にとって適当と判断した地点に密着し、イスラームとの関わりや結婚生活の実態、家族との繋がりについて詳細に聞き取った。また、1964 年のザンジバル革命、2000 年のタンザニア総選挙、2008 年のケニアの大統領選挙および国会議員選挙についての意見を含め、女性たちの政治との関わりもある程度聞き取ることができた。ライフヒストリーの聞き書きに当たっては、調査対象となった女性たちが日常的に用いているスワヒリ語変種で話してもらっており、その意味で、3 年度にわたって収集した語りは、言語学および社会言語学的な価値もある資料となっていると思われる。

研究成果の概要 (英文) : We did our research in Swahili Coast Area during three years. Each member lived with some families for several days in the villages where we decided that we would be able to collect women's life histories and dictated in detail women's narratives on their relationship with Islam, truth of marriage lives, the family connections and so on. Again, we collected to a certain degree women's opinions on politics, for example, on the Zanzibar Revolution in 1964, Tanzania's general election in 2000, Kenya's general election in 2008. We used their own languages, that is, their own varieties of Swahili Language when we dictated their life histories, so, we can use the narratives as data for linguistic study and socio-linguistic study.

交付決定額

(金額単位：円)

|         | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|---------|-----------|-----------|-----------|
| 2008 年度 | 1,400,000 | 420,000   | 1,820,000 |
| 2009 年度 | 1,100,000 | 330,000   | 1,430,000 |
| 2010 年度 | 1,100,000 | 330,000   | 1,430,000 |
| 総計      | 3,600,000 | 1,080,000 | 4,680,000 |

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：ライフヒストリー、スワヒリ地方、スワヒリ語諸変種、イスラーム、ジェンダー、結婚・出産・子育て

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 先行研究の状況

これまでのアフリカにおける文化人類学的調査研究では、多くの場合、「性役割」の面や「特異」であると判断されがちな面が強調

されてきた (和田正平、1988 年、『性と結婚の民族学』、同朋舎。を参照)。その状況について富永は、「わが国におけるアフリカ女性の研究はおそろしく立ち遅れていると言わざるをえない。その中では、文化人類学の分

野での業績があるが、それも一部を除けば、調査こぼればなし的なエッセイの域をでない。社会科学の分野では、寡聞にして数編の論文を知るのみである。実際、欧米やアフリカでの研究文献の紹介さえまだ充分になされていないのが現状である」(富永智津子、1993年、「アフリカ女性研究の現在—地域研究からのアプローチ」、『アフリカ研究—人・ことば・文化』(赤阪賢、日野舜也、宮本正興編)、pp. 224-237、世界思想社)と述べている。

## (2) 本研究の視点

本研究では、文化人類学的視点はもちろんのこと、政治、経済、歴史、宗教、文学、言語などの分野にまたがって「ジェンダー論」を展開し、アフリカ女性研究、ひいては文化人類学という分野に対して新たな視点を提供したいと考えた。

## (3) 本研究の対象地域

フィールドとして東アフリカ海岸部および島嶼部(以下、スワヒリ地方と記す)を選択しているが、それは次のような理由による。当該地域を含むケニア共和国およびタンザニア連合共和国においては、スワヒリ語というアフリカ固有の言語を国家語として掲げ、国内のあらゆる分野(教育、マスコミ、政治、経済、司法など)においてその使用頻度が高い状況にあるが、女性に焦点を当てた場合、その使用頻度や使用領域、使用変種にかなりバラエティが認められることが予想される上、(未就学の割合が高いので)書記言語としてのスワヒリ語に接していない可能性が高いことから、例えばジェンダー関連の書籍や雑誌などにアクセスできない人が必ず存在する。このことは開発や経済の問題とも密接に関連しており、ことばの問題に着目することで生活の様々な面における格差が浮き彫りにされ、ジェンダー間の差異のみならず、女性の世代間、地点間、民族間、階層間などの差異まで把握する一助となることが期待できた。また、研究代表者以下、研究協力者全員がスワヒリ語を問題なく理解できることから、先に挙げたジェンダー関連の書籍、雑誌、ならびにジェンダーを扱った文学作品などの文献研究もまじえながら、生の資料であるオーラルヒストリーや口承文芸の分析が可能であると考えられたからである。

## 2. 研究の目的

### (1) 総合的な目標

東アフリカのスワヒリ地方(本研究の中心的調査地は、その中でもケニア共和国北部海岸部からタンザニア連合共和国北部海岸部及び島嶼部)において、国家史の中ではこれまでほとんど重要視されてこなかった多くの女性たちに対して、その半生に関する聞き取り調査を行なうことによって、「人種的、

階層的、性的」に差別されてきたと考えられている女性たちが、「表舞台に立つことはなかったかも知れないが、実際には政治経済的に非常に大きな役割を果たしてきた」ということを明らかにするための一次資料を収集することが大きな目的であった。

### (2) 個別調査の目標

一調査地点において、少なくとも5人の女性たちからライフヒストリーや口承文芸の聞き取りを行ない、世代間、地点間、民族間、階層間などの指標を用いて、「スワヒリ語を母語として話す人々が住むスワヒリ地方」とまとめられる地域において、女性たちのジェンダー意識や家族観に差異が見られるのかどうかを探りたいと考えた。

## 3. 研究の方法

### (1) 全体的方法

研究代表者の竹村と研究協力者の井戸根および宮崎は、対象地域において、女性のオーラルヒストリーの収集にとって適当な調査地点を広く踏査し、生活誌の記述、政治経済活動や社会活動、宗教との関わり方などの特徴把握に努めた。また、都市と農村などの位相、世代間のカルチュラルギャップなどを考慮に入れつつ、その地点を含む地域社会、国家社会のジェンダーに対する視点を探った。

### (2) 調査の概要

住み込みによる参与観察とインタビューを基本としたが、対象地域の大学や研究機関で資料収集、調査研究を実施し、現地研究者との交流をはかった。さらに、調査参加者全員が、現地で購入できる「女性雑誌」や新聞、ジェンダーに焦点を当てた文学作品を収集、分析し、現代タンザニアおよびケニアにおけるジェンダー観の把握に努めた。

①研究代表者の竹村は、主にタンザニア連合共和国のザンジバル島とペンバ島でのオーラルヒストリーならびに口承文芸収集、イスラム文化におけるジェンダーの実態把握に努めた。研究協力者の井戸根は、ケニア共和国のラム島でのオーラルヒストリーならびに口承文芸収集、ラム島の結婚習慣の実態把握に努めた。同じく研究協力者の宮崎は、タンザニア連合共和国のザンジバル島において、オーラルヒストリーの収集とインタビューに基づく通婚観調査に努めた。

②各調査地でのオーラルヒストリーおよび口承文芸は、可能な限りコンサルタントの話すスワヒリ語変種で聞き書きすることに努めた。また、コンサルタントについては、階層、世代、出自、学歴などに偏りが生じないように、十分配慮した。

## 4. 研究成果

### (1) 2008年度

研究代表者および2名の研究協力者（大阪大学外国語学部非常勤講師・井戸根綾子、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員・宮崎久美子）が現地での個人調査を行なった。竹村はタンザニア連合共和国のザンジバル島およびペンバ島において、井戸根はケニア共和国のラム島において、そして宮崎はザンジバル島においてそれぞれ女性のライフヒストリー収集に当たった結果、女性とイスラームとの関わりや結婚生活の実態、および政治との関わりもある程度把握することができた。竹村は特に1964年のザンジバル革命に着目し、ザンジバル島北部県においてこの前後から政治活動に関わった女性にインタビューを行なったが、彼女のライフヒストリーからは、国家史に名前が出てくることはない市井の一女性が、革命後の政治混乱期に周囲の女性たちに政治的覚醒を促した功績が読み取れた。またペンバ島では、同じザンジバル革命によって土地を失うこととなった地主男性の第二夫人だった女性にインタビューを行ない、革命後に「反体制側」の人間として生きることがどれほど苦難に満ちていたかを語ってもらった。井戸根は、2007年のケニア大統領選挙が「辺境」であるラム島の女性たちにどのような影響を与えたのかに着目し、選挙活動時の女性たちの意識について特にインタビューを行なった。彼女たちの語りから、生活上の利益を得るために下層の人々がどのような戦略を用いて政治家を自分たちの側に取り込もうとするのかが読み取れた。宮崎はザンジバル島の農村部で生きる女性の半生がどのようなものであったのかについて、詳細なインタビューを行なった。彼女の語りから、「結婚」にまつわる様々な事象が明らかになった。これら調査の成果は各人の論文でまとめている。

#### (2) 2009年度

前年度と同メンバーにより個人による地域調査を展開した。竹村はタンザニア連合共和国のザンジバル島において、井戸根はケニア共和国のラム島において、そして宮崎はザンジバル島においてそれぞれ女性のライフヒストリー収集に当たった。

また、昨年度に行なった調査に基づいた学術発表を、日本アフリカ学会第46回学術大会において「女性の語りから読み解く社会」と題したセッションとして行なった。竹村は、1964年のザンジバル革命前後から政治活動に関わった女性のインタビューをもとに発表した。井戸根は、2007年のケニア大統領選挙が「辺境」であるラム島の女性たちにどのような影響を与えたのかに着目し、選挙活動に何らかの形で関わった女性たちのインタビューをもとに発表した。宮崎はザンジバル島の漁村での組合活動でリーダー的存在で

ある女性のインタビューをもとに発表した。

#### (3) 2010年度

本年度も同一メンバーが個人による地域調査を展開した。竹村はタンザニア連合共和国のザンジバル島において、井戸根はケニア共和国のラム島において、そして宮崎はザンジバル島においてそれぞれ女性のライフヒストリー収集に当たった。竹村は2008年度、2009年度にインタビューを行なった女性に加え、新たに2名の同年代の女性にもインタビューを行ない、結婚生活の実態、家族との繋がりについて詳細に聞き取った。その結果、ザンジバル革命前後に結婚を経験した同年代の女性たちが、激動の時代をどのように生きてきたかがある程度把握できた。井戸根はラム島における離婚率の高さに着目し、女性が結婚→離婚→再婚というサイクルの中でどのような問題や苦悩を抱えるのか、また、その中でどのような生活戦略を持っているのかを聞き取ることができた。宮崎は引き続きザンジバル島の漁村で組合活動のリーダーを務めた女性のライフヒストリーの聞き書きを行ない、2008年度および2009年度に聞き逃した部分について詳細に聞き取ることができた。また、彼女の娘や孫娘の結婚についても聞き取り、結婚にまつわる昔と今の違いについてもある程度把握することができた。

竹村は、大阪大学世界言語研究センター・工学研究科主催の「世界の文化講義」（テーマ「人生観と家族観を考えるータイ、スワヒリ、ロシアの恋愛と結婚を通してー第2回：スワヒリの場合」）において、昨年度および今年度に行なった調査結果を中心に講演を行なった。また、調査者3名とともに学術雑誌『スワヒリ&アフリカ研究』第22号に調査結果を発表した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

1. 井戸根綾子. 2011. 「女性グループとマエンデレオーラムの一女性の「語り」からー」『スワヒリ&アフリカ研究』第22号. pp. 25-45. (査読有)
2. MIYAZAKI Kumiko. 2011. “Maisha ya Mwanamke wa Jambiani (3) - Juu ya ‘Ndoa’ na ‘Talaka’ -” *Journal of Swahili and African Studies* No. 22. pp. 46-61. (査読有)
3. TAKEMURA Keiko. 2011. “Tusikilize Sauti za Wanawake wa Uswahilini (3-1) - Shida za Kuwalea Watoto wa Wake Wenza -” *Journal of Swahili and African Studies* No. 22. pp. 62-71. (査読有)
4. 宮崎久美子. 2010. 「Fatma Binti Baraka

- というおばあちゃん—Bi. Kidude という歌姫』『アフリカ文学研究会会報』第 40 号. pp.17-18. (査読無)
5. 井戸根綾子. 2010. 「ラムにおける選挙運動と女性—女性の「語り」を通して—」『スワヒリ&アフリカ研究』第 21 号. pp.1-29. (査読有)
6. MIYAZAKI Kumiko. 2010. “Maisha ya Mwanamke wa Jambiani (2) - Kumbukumbu za Mimba, Uzaaji na Ulezi -” *Journal of Swahili and African Studies* No.21 . pp.30-44. (査読有)
7. 宮崎久美子. 2010. 「<書評>ニューエクスプレス スワヒリ語」『アフリカ文学研究会会報』第 40 号. pp.24-25. (査読無)
8. MIYAZAKI Kumiko. 2009. “Maisha ya Mwanamke kutoka Jambiani - Historia ya Maisha yake pamoja na Maisha ya Jambiani -” *Journal of Swahili and African Studies* No. 20. pp.67-86. (査読有)
9. 竹村景子. 2009. 「タンザニアにおける「カンガ」の生産状況と着用状況—カンガ生産工場でのインタビューと女性たちへの「着用意識」調査から—」『スワヒリ&アフリカ研究』第 20 号. pp. 18-39. (査読有)
10. 竹村景子. 2009. 「「スワヒリ女性の声を聞く (3-1) —イスラームとザンジバル革命後の政治活動がもたらしたもの—」『スワヒリ&アフリカ研究』第 20 号. pp.40-66. (査読有)
11. 竹村景子. 2009. 「ラマダン中に村で食す—チャアニ村のフタリとダク」『アフリカ文学研究会会報』第 39 号. pp. 21-26. (査読無)
12. 井戸根綾子. 2009. 「女性の生活の中にみる言語—ケニア、ラムを事例に—」『スワヒリ&アフリカ研究』第 20 号. pp.1-17. (査読有)

[学会発表] (計 3 件)

1. 竹村景子. 「女性の語りから読み解く社会 (1) あるザンジバル女性の政治活動—革命とイスラームがもたらしたもの—」. 日本アフリカ学会第 46 回学術大会 (於: 東京農業大学, 2009 年 5 月 24 日)
2. 井戸根綾子. 「女性の語りから読み解く社会 (2) ケニア・ラムの女性と選挙: 女性の「語り」を通して」. 日本アフリカ学会第 46 回学術大会 (於: 東京農業大学, 2009 年 5 月 24 日)
3. 宮崎久美子. 「女性の語りから読み解く社会 (3) あるザンジバル女性のライフストーリーから」. 日本アフリカ学会第 46 回学術大会 (於: 東京農業大学, 2009 年 5 月 24 日)

[図書] (計 3 件)

1. 竹村景子. 2010. 『ニューエクスプレス ス

- ワヒリ語 (CD 付)』. 白水社. 151p.
2. 竹村景子. 2009. 「スワヒリ語」『事典 世界のことば 141』(梶茂樹・中島由美・林徹編). 大修館書店. pp.494-497.
  3. 竹村景子. 2009. 「第 13 章 スワヒリ語の発展と民族語・英語との相克—タンザニアの言語政策と言語状況 第 1 節および第 2 節」『アフリカの言葉と社会』(砂野幸稔・梶茂樹編). 三元社. pp.385-399.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

竹村 景子 (TAKEMURA KEIKO)  
大阪大学・世界言語研究センター・准教授  
研究者番号: 20252736

### (2) 研究協力者

井戸根 綾子 (IDONE AYAKO)  
大阪大学・外国語学部・非常勤講師

宮崎 久美子 (MIYAZAKI KUMIKO)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・共同研究員